

骨端症の現状と実際

骨端症は、長骨の骨端核や短骨に起こる阻血性壊死で、骨端や成長軟骨板の發育障害を生じます。繰り返される微小な外傷、遺伝的素因、血管異常や内分泌異常など多くの因子が原因と考えられています。

多くの骨端症が報告されており、骨端症の發生部位ごとに、最初の報告者の名前がつけられ、好発年齢や性差などの疫学、症状、治療経過や予後が異なります。

本特集号では、それぞれの分野におけるエキスパートの先生方にご執筆をお願いいたしました。まず、骨端症の病態や全体像について概説していただき、骨端症によってはオーバーユースによるスポーツ障害として発症することが多いことから、スポーツ医学の立場から、早期発見から予防までを述べていただきました。また、整形外科領域で急速に普及しつつある超音波検査による診断や体外衝撃波療法による治療につきましても、解説していただきました。

骨端症の發生部位では、脊椎の Scheuermann 病（椎体）、骨盤の van Neck 病（坐骨結節）、肘関節の Panner 病（上腕骨小頭）、手関節の Kienböck 病（月状骨）、股関節の Legg-Calvé-Perthes 病（大腿骨頭）、膝関節の Blount 病（脛骨近位）・Osgood-Schlatter 病（脛骨粗面）・Sinding-Larsen-Johansson 病（膝蓋骨下極）、足部の Sever 病（踵骨）・Köhler 病（舟状骨）・Freiberg 病（中足骨骨頭）・Iselin 病（第 5 中足骨粗面）など、日常診療で比較的良好に遭遇する骨端症から、馴染みの薄い比較的にまれな骨端症まで、網羅的にわかりやすく述べていただきました。

ご多忙のなか、本特集号にご執筆いただきました先生方に感謝いたしますとともに、本特集号が読者の先生方にとって、骨端症の診断や治療にお役立ていただけることを願います。

（和田晃房）